南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

今年の教区の目標

すべての命を守るため、
キリストと共なる
平和の道を歩みましょう。

〒902-0067　那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474

発行人　W.F.バーント司教　1部40円
http://www.naha.catholic.jp/

(1) 2020年10月1日（毎月1日発行）　カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ　第743号（10月号）

ロザリオの月

神の子の神秘を心のうちに 黙想しつつ、手にぞ弄るロザリオの珠

十月はロザリオの月です。

「ロザリオ」という名はロザリオの数珠を意味します。ロザリオの鎖の基本となる部分は、一個の単独の珠と十個の連続した珠で構成された「連」が五つつながって一つの環になっています。「一連」は十回の「アヴェ・マリアの祈り」の頭に「主の祈り」を付け、結びに「栄唱」を付けたものです。これを五回くりかえして「一環」となります。ロザリオの「連」のことを、英語では decade と言いますが、これは十個を意味するラテン語に由来する語です。ロザリオの祈りは「アヴェ・マリアの祈り」を十回唱えることを基本にした信心業であり、心と体、祈りと黙想を一体化し、しかも、老若男女を問わず、また健康な人はもちろんのこと、病気で床に伏していても、電車や自動車の中、状況によっては仕事中でもできる信心業です。聖母マリアを通して、キリストの救いの業を黙想し、聖母に取次ぎを願う祈りです。

一般に用いられているロザリオには五連の環になった部分に、十字架と単独の珠と三連の珠に加えてもう一個の単独の珠のついた鎖が三叉の金具によって繋がっています。環に取り付けられた十字架のついた鎖の部分は、ロザリオの祈りの準備のためです。最初の十字架で「使徒信条」を唱え、次の珠で「主の祈り」、三個続いた珠で「アヴェ・マリアの祈り」を三回唱え、結びとして「栄唱」を唱えます。もう一個の珠は環から外れていますが、この珠がロザリオ本体の最初の主の祈りのためです。

ロザリオの聖母　カラヴァッジョ

ロザリオの神秘（「奥義」または「玄義」とも呼ぶ）は、「喜びの神秘」・「苦しみの神秘」・「栄えの神秘」・「光の神秘」の四環で成り立ち、それぞれに五連ずつ黙想のテーマ（神秘）と祈りの意向が定められています。全四環、二十連となります。修道会などでは一日に全四環を唱えるところもあるようですが、一般信徒のためには曜日ごとに黙想する神秘を割り当てて、一日一環を唱えるよう勧められています。曜日ごとの割当は「喜びの神秘」（月・土）・「苦しみの神秘」（火・金）・「栄えの神秘」（日・水）・「光の神秘」（木）のようになっています。

教会は教皇様たちの口を通してロザリオの優れた面について様々に述べてきました。ロザリオは大衆のための「教会の祈り」と呼ばれており、全福音の大要、神の子の神秘を中心に置いた祈りであり、マリアに対する連願の形をとった「アヴェ・マリアの祈り」の唱えは、キリストに対する途切れることのない賛美であると教えています。さらに、心静かにロザリオの祈りが唱えられれば、キリストに最も近い方聖母マリアの目を通して主キリストの生涯を黙想し、また、観想することもできると教えています。

ロザリオは誰でもすぐ祈ることのできる単純化された祈りでありながら、信仰の真髄に深く入り込むことのできる祈りです。心も体も一体となって、キリストの生涯に思いを馳せ、その道行きを一緒に辿る、大切にしたい祈りです。一枚一枚のバラの花びらになぞらえて「アヴェ・マリアの祈り」を繰り返して唱えることは単純な動作ではありますが、単純であるがゆえに、唱えながら私たちは潜心し、自分の信仰とその理解を深め、自分の生活と結びつけて祈ることができるのです。

ロザリオの月を通して、ロザリオの祈りに親しむ習慣を身につけて参りましょう。

Looking back with gratitude… Marching ahead with hope

Greetings from Oroku parish!

Our hearts are filled with gratitude to God, as we look forward to celebrate the Golden Jubilee of our parish. Oroku parish officially became a faith community in the year 1970, dedicated to St Francis of Assisi as its patron saint. In the past 50 years this community has grown in faith and bore witness to the Gospel values.

To commemorate this great milestone, we planned various activities. A year ago when we first planned this celebration, we were all thrilled. As preparations began, first we chose 'In union with Christ, let us witness our faith joyfully' as our jubilee year theme, making efforts to renew our spiritual life. Before the start of the year, we had our Christmas caroling, which for several years we were not able to do. It gave the community a fresh start for Christmas season and for a new year. Planning of a pilgrimage, a concert, an inspirational talk and a commemorative T-shirt were thought of as some of our activities.

Sudden outbreak of pandemic made us to rethink of our activities, which led us to cancel all our planned activities one by one. One thing that was left on our list was the commemorative T-shirt. It was all prepared at the start of 2020. We planned to sell them on Easter Sunday, 6/23 Peace walk, and to the summer camp. But due to Covid-19, all these events in the diocese too were cancelled. Social distancing, disinfecting, sanitizing and protection from the virus become a regular habit. The fear of contacting anywhere in anytime affected everyone. The usual Sunday church goers have gradually decreased. One thing that was left for our Golden Jubilee was 6 boxes of commemorative T-shirts. In this situation we had no option but to appeal to the generosity of people in different parishes. So we contacted parish priests in the diocese expressing our desire to sell them in their parishes and they extended us their support whole heartedly. I think what makes a Catholic community work is the sharing and helping of each other. We want to extend our utmost appreciation for the warm reception of all the parishes every Sunday. We take this opportunity to thank everyone for extending their helping hand.

This T-shirt designed by one of our parishioner, pictures a dove symbolizing The Holy Spirit, the messenger, the olive branch in dove's beak symbol of peace and God's grace. Tau cross of St. Francis, the patron of our parish and the 3 leaf shape looking on both sides of the Tau cross symbolizes the hands of people from different nations uniting. On 4th October, the feast day of St Francis, we gather as parish community to thank God for all the blessing we have received in the past 50 years. Along with our Bishop Wayne Berndt, we lift our hearts to God in the sacrifice of thanksgiving. Due to Covid-19 restrictions, we regret that we are not able to invite the faithful of the diocese, as we had planned in the beginning. We ask you to join us in prayer and in spirit in thanking the Lord.

As we celebrate this Golden Jubilee of our parish, we look back with gratitude and march ahead with hope of growing deeper in our relationship with Jesus. We keep before our eyes the Golden Jubilee theme "In union with Christ, let us witness our faith joyfully".

Nashiro Joi
Oroku Parishioner

2020年9月拡大司祭・助祭会議議事録

開催日時：2020年9月8日（火）11：00～12：30　開催場所：黙想の家

1. 報告及び連絡事項

・司会と始めの祈りはウェイン司教。
・前回（7月会議）の議事録確認－新田。
・ウェイン司教より7月会議の決定が、コロナ禍により様々に変更、また中止されたので、それについての確認作業と報告が行なわれた。
・8月11日（火）Zoomを活用した司祭たちとのリモート会議を開催し、その報告がなされた。緊急時やコロナの更なる拡大に備え、ノウハウを良く修得してさらに活用するよう、押川司教からも激励があった。
・県の緊急事態宣言を受け、8月15日（土）に本島内の主任司祭と電話で確認の上、公開ミサは継続とした。但し、療養所の方針により愛楽園教会と南静園教会では公開ミサの休止が継続されており、また、状況を考慮して伊江島と大里の巡回教会でも公開ミサは休止となっている。
・津波古事務局長より、教区事務所でもテレワークに対応できるよう、実践形式で準備を進めていること、また安里の駐車場の料金の取扱も振込みに移行して、コロナ禍への対策を計っている等の報告があった。
・2020年度第1回臨時司教総会がオンライン開催され、その報告を津波古事務局長が行った。
2020年5月開催予定だったパックス・クリスティ・インターナショナルの広島での世界大会は中止。
2020年11月開催の日韓司教交流会は2021年に延期。
2022年8月開催予定のワールドユースデー・リスボン大会は2023年に延期。
2020年度に限り「世界広報の日」と「世界難民移住移動者の日」の献金は、中央協議会への送金をせずに教区に留め、2021年度分の教区分担金を50％減額すること等が報告された。
・日本司教団は毎年9月1日～10月4日を「すべてのいのちを守るための月間」と定め、それに合わせて作成した祈りのカードを配布した。その祈りを全員で唱え、教皇訪日の際の呼びかけに応えて新たに設定された月間の趣旨説明文を読み合わせて確認し、各小教区分のカードが分配された。今後もより良く活用されるよう、津波古事務局長から説明があった。
・9月22日に新潟教区の司教叙階式が行われ、パウロ成井大介被選司教が叙階される旨ウェイン司教より報告された。
・10月18日の「世界宣教の日」の教皇メッセージがマーシーさんから配られ、良く読んで活用するよう呼びかけられた。
・小禄教会デニス神父（カプチン会地区長）から故石神司教の7回忌について報告が行われた。命日の10月25日は主日に当るが、コロナ禍を考慮して各小教区で追悼していただき、教区全体での追悼ミサは行われないことが報告された。なお、納骨先の小禄教会の9時のミサでウェイン司教主式により追悼の祈りを捧げるが、他の小教区の方はそれぞれの場でお祈りいただくよう呼びかけられた。
・その他
・名護教会の樹木の伐採が無事終了したことがボスコ神父から報告された。
・小禄教会のデニス神父から、小禄教会が塗装工事中であることと、小禄教会の50周年行事は中止されるが、小禄小教区内で50周年感謝ミサ捧げることが報告された。
・台風の被害がなかったかの確認も行われ、名護で雨漏りなどの被害の報告があった。

2. 審議事項

・「ゆいまーるボックス」の設置について、カリタス・ジャパン担当者のマーシーさんから提案がなされた。那覇市で「ゆいまーるボックス」の設置活動に携わっている方から電話があり、活動内容の報告を受け、教区として支援していけるのか、他にどういった支援ができるのか等の討議が行われた。ベトナム人司祭たちが取組んでいるベトナムの技能実習生たちへの支援活動の報告も参考に、コロナ禍で困っている大勢の方々に教会としてどう支援していけるのかをそれぞれの小教区でも検討してみるよう要請がなされた。
・教区司祭集会について、ウェイン司教と津波古事務局長から再々提案があった。今回の計画では10月19日から22日の日程で行うこととし、すでに計画済みのプログラム等の運営については、引き続きブイ神父にお願いすることが報告された。
・ウェイン司教よりその他の報告が行われた。
・信徒評議会「カテキスタ養成講座」は延期、様子を見ながら検討する。
・サマーキャンプは、何度か計画を練り直しながら努力を重ねたが結果的に中止となった。
・宮古で予定されていた11月の拡大司祭助祭会議も中止。通常開催となる。
・長崎教会管区司祭集会は来年に延期された。
・奇跡の主の祭りは規模を縮小して、スペイン語ミサの中で行われる。
・GFCフィリピン人信徒集会も今年度は中止が決まった。
・コロナ禍であらゆる行事を中止するだけではなく、状況がゆるすのであれば、規模縮小や簡素化、ズーム等を活用したリモートでの会議開催なども検討するよう呼びかけられた。
・コロナ禍のために変更したミサ時間等を元に戻すのは、状況をよく考慮した上で基本的には小教区の判断となるが、必ず司教と相談の上で実施するよう呼び掛けられた。
・次回拡大司祭・助祭会議は10月6日（火）午前10時～12時、教区センターで行われる。

2020年9月17日　　記録：新田　選　　承認：ウェイン・フランシス・バーント司教

ニヌファ主

私の毎日の聖なるロザリオの祈り

サニー・カンティラーノ 神父 MSP
具志川教会・主任司祭

私が何処にいても、毎日のロザリオの祈りは始まります。大抵は朝の早い時間から、車を運転し始める時、ミサ聖祭の前、そして夜に休む前などです。今日は、十月という月の始まりというだけではなく、ロザリオの月の始まりです。私はロザリオの月を、その神秘の中を旅して分かち合いたいと願います。

私たちの人生には舞台があって、分かち合い、映し出し、体験を通して、私たち聖なるロザリオの祈りで、祈りの旅路を真実に分かち合うことができるのです。

喜びの神秘は、私自身と、私の任務、毎日の計画も同様に、祝福された乙女マリア様の執り成しに委ねることです。私たちの中、どれほどの人が、早朝に目覚めて直ぐに祈るとか、または祈りの中に一日を始めているでしょうか。

現在の私たちの生活は、通りや車、学校、多くの建物に囲まれて、滅多に祈ることもありません。毎日祈る必要があると思うことや、心の中や胸元、口元で十字の印を刻んで一日を始めることさえも、現在の私たちにとっては贅沢なことであるのかもしれません。ミサ聖祭の直後に、私は普段と同じ道路を通りますが、突然新しい事故を起こしました。

その日は討議、口喧嘩、諸問題を抱えて一日を始めていたからです。実際私たちの一日の始まりは、永遠の人生から振り返って見る時、吟味し、体験することのできる最後の時であったかもしれないのです。

悲しみの神秘は、私たちの旅路を続けるために、自分の過ちと、過去から学んだことを受け入れることです。私たちは、多くの後悔の中にある「もし」と「でも」を、人生の一部で、薬味として必要だったから、不可欠なものとして受け入れるときがあります。痛み、困難、試練、痛い失敗など、たくさんの訓練を受けて人生の学校から、私たちは学びます。しかしそれは、私たちが挫けた所に留まるという意味ではなく、私たちの目の前には次の日が待ち受けているのですから、進み続けます。遅かれ早かれ、太陽は東から出て、西に沈みます、私たちの過ちや人生の悲しみもそのようになるでしょう。

光の神秘は、毎日の人生を、情熱をもって自分の仕事を果たすことです。私たちがどれほど善であっても、時には毎日の生活がほとんど完璧であったとしても、人生を始めた所に戻りたくはないように、私たちの人生は、突然目の前に現れて驚かされる一瞬の閃光のようです。

私たちが先に計画したり、願ったりはしないのですが、どこからともなく現れてくるものを、私はある失敗、試み、障害、問題や懸念などと呼んでいます。人生の多くの涙や痛みを吹き払い、新しくするために、人生の嵐のように、それらすべてが必要なので、私はそれを、学びの経験と呼んでいます。

最後に、自分自身を放棄し、自分に死ぬことがないなら、栄光の神秘はあり得ません。私たちの召命、私たちの将来、また私たちの人生も、神様にのみ任命された僕、司祭、預言者であるイエス様によって授けられた洗礼を通して、真の意味を見出します。

聖なるロザリオのこの月、私たち皆が聖霊に満たされ、イエス様の喜び、苦しみ、栄の神秘を黙想しながら、人生の旅路を歩み、祈りましょう。それは私たちが聖なる福音に従い、福音に生き、福音を告げ知らせるためです。アーメン！

■十月の教会暦

1日・幼いイエスの聖テレジア おとめ教会博士
2日・守護の天使
5日・聖ファウスティナ・コヴァルスカおとめ
7日・ロザリオの聖母
15日・イエスの聖テレジア おとめ教会博士
17日・アンチオケの聖イグナチオ司教殉教者
22日・聖ヨハネ・パウロ二世教皇
28日・聖シモン聖ユダ使徒

■聖人の叙唱

聖なる父、全能永遠の神、聖人を通して示されたあなたの栄光をたたえ、感謝の祈りをささげます。

あなたは聖人たちの信仰のあかしによって、いつも教会に新しい力を注ぎ、限りない愛を示してくださいます。

わたしたちもその模範に励まされ、取り次ぎの祈りに支えられ信仰の歩みを続けます。

あなたをたたえるすべての天使、聖人とともに、喜びのうちに賛美の歌を歌います。

たて軸よこ軸

洗礼の恵みを受けて

名護教会　クララ　池間　友美

私は、二〇二〇年五月三十一日（日）聖霊降臨の主日に、クララの霊名で洗礼のお恵みをいただきました。

まずこの場を借りて、洗礼まで私を導いてくださった皆さまにお礼を申し上げます。そして私が神様と出会い、洗礼の恵みをいただいたきっかけを、これからお話しさせてください。

一つ目のきっかけは、学生時代にカトリックの大学に通っていた事です。シスターや洗礼を受けた先生方に教授して頂いた経験の中で、洗礼のすばらしさを知りました。先生方の学生への接し方がとても穏やかで、学生の心を満たしてくれました。私は恵まれた学習環境の中で、祈ることの大切さを学びました。

二つ目のきっかけは、卒業後働いていた仕事場の近くで主人と出会った事、彼が信者であった為、カトリック名護教会の方々とも出会えた事です。結婚に至るまで、中神父様が勉強会をしてくださり、式の当日は教会の皆様が参列してくださいました。とてもあたたかく和やかな雰囲気の式で、母の目からも自然と涙があふれていました。その後、私は子どもに恵まれ、子ども達も幼児洗礼を受けさせて頂きました。子ども達の洗礼を受ける姿を見たり、一緒に日曜日に教会に通う中で、信者の方々に親切にして頂き、洗礼を受けたいと考えるようになっていったのだと思います。

三つ目に本土に暮らす母の突然の病がきっかけとなりました。突然の悲しみに動揺していましたが、脳裏にあった主の祈りを口にしている私がいました。急変した母の容態が回復する度に、神さまからの大きなお恵みを感じていました。以上の三点から私は神さまの存在を知り、感謝の気持ちで洗礼を受けたいと思いました。

洗礼を受けるまでの間、3名の洗礼志願者の方と、シスターや神父さまに勉強会を開いてもらいました。志願者の方々と同じ目標に向かい、励まされながら勉強をした経験はとても貴重な機会となりました。

シスター小原から教えて頂いた中で心に残っている言葉があります。それは「信仰生活において無駄な日は一日もなく、どんなに退屈に過ぎ去ってしまったと思う日でも、後から大切な日々だったと振り返ることができる」という言葉や、「この教会で一緒にお祈りをする方々は、信仰共同体といって一つの体のよう、皆がいて初めて成り立つ。助け合って頑張って下さい」という言葉でした。シスターは、私にはまだ難しい聖書の言葉をわかりやすく教えてくださいました。博識なシスターのような女性になりたいと思い、霊名をシスターと同じ聖クララにさせて頂きました。現在は京都の修道会に戻られましたが、いつもシスターの御健康を祈っています。

最後に私の好きなお祈りの言葉についてお話します。

アヴェ・マリアの祈りの中で「神の母聖マリア、わたしたち罪びとのために、今も、死を迎える時もお祈り下さい」という言葉です。洗礼を受けた当初は、母や家族が元気でいられるよう、体調が回復することを感謝する気持ちでお祈りをしていました。

しかし今、私は母の難しい病状と向き合うことになりました。その時に、それまでのアヴェ・マリアの祈りが、死に向かうかもしれない道のりの中でも、相手が安らかに過ごせるように祈る言葉に聞こえてきました。こうして祈ることで、私の心は励まされ、整います。ですから、私は今アヴェ・マリアのお祈りをする時間を楽しみにしています。

また、教会の入り口に一枚のポストカードが飾られています。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい」（テサロニケの信徒への手紙Ⅰ五・16～18）。

私はこの聖句も大好きです。これからも祈ることを続け、周りの方に感謝できる心を育てていけるよう、頑張ります。

■アシジの聖フランシスコ

毎年十月四日がこの聖人の記念日になりますが、典礼暦では四日が主日に当る場合、主日が優先されることになります。そのため、今年の典礼暦にはアシジの聖フランシスコの表記が見当りませんが、聖フランシスコを創立者と仰ぐ修道会では、祭日と位置づけられて、大きな祝日となっています。

第二次世界大戦後、奄美を含む琉球諸島は、カプチン会がその宣教をになうこととなりました。カプチン会はフランシスコ会、コンヴェンツァール会とともに、アシジの聖フランシスコを創立者としていただく三つの男子修道会です。そのため、戦後の那覇教区では宣教師たちの影響もあって、フランシスカンの伝統が受け継がれてきました。

聖フランシスコの記念日の前日三日には、聖フランシスコの帰天を記念して、トランジトゥス（帰天祭）が、執り行なわれます。トランジトゥスとは『移行』という意味で、師父フランシスコがこの世から天国へ移ったことを記念する儀式です。

二〇二〇年「世界宣教の日」（二〇二〇・一〇・十八）教皇メッセージ

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ六・8）

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

昨年十月、教会全体が「福音宣教のための特別月間」に熱意をもって取り組んだことを神に感謝したいと思います。わたしはこの特別月間が、「洗礼を受け、派遣される―世界で宣教するキリストの教会」をテーマとする歩みを通して、多くの共同体で、宣教のための回心を促すことに貢献したと確信しています。COVID-19（新型コロナウイルス感染症）のパンデミックがもたらす苦しみやさまざまな課題が著しい今年、教会全体は、預言者イザヤの召命物語にある次のことばに照らされながら、この宣教の歩みを続けています。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ六・8）。

このことばは、「だれを遣わすべきか」（同）という主の問いかけに対する、つねに新たにされるこたえです。神のみ心から、神のいつくしみから出るこの呼びかけは、今日の世界的な危機のただ中で、教会と人類に向けられています。「福音の中の弟子たちのように、思いもよらない激しい突風に不意を突かれたのです。わたしたちは自分たちが同じ舟に乗っていることに気づきました。皆弱く、先が見えずにいても、だれもが大切で必要な存在なのだと。皆でともに舟を漕ぐよう求められていて、だれもが互いに慰め合わなければならないのだと。この舟の上に……わたしたち皆がいます。不安の中で声をそろえて『おぼれて』（マルコ四・38）しまうと叫ぶあの弟子たちのように、わたしたちも自力で進むことはできず、ともに力を出すことで初めて前進できるのだと知ったのです」（「特別な祈りの式におけるウルビ・エト・オルビのメッセージ」二〇二〇年三月二十七日）。

わたしたちは心底おびえ、途方に暮れ、不安にさいなまれています。痛みと死により、人間のもろさを痛感していますが、それと同時に、だれもが生きたい、悪から解放されたいという強い思いを抱いていることに気づかされます。こうした状況においては、宣教への呼びかけと、神と隣人への愛のために自分の殻から出るようにとの招きは、分かち合い、奉仕し、執り成す機会として示されます。神から各自に託された使命は、おびえて閉じこもる者から、自分を差し出すことによって自分を取り戻し、新たにされる者へとわたしたちを変えるのです。神は、イエスの使命が成し遂げられた十字架でのいけにえ（ヨハネ十九・28―30参照）において、ご自身の愛が一人ひとりに、そして皆に向けられていることを明らかにされます（ヨハネ十九・26―27参照）。そして、遣わされる覚悟ができているかと、わたしたちにお尋ねになります。なぜなら、神は愛であり、使命への絶え間ない働きの中で、いのちを与えるためにご自分の外につねに出て行かれるかただからです。父なる神は、人間への愛ゆえに、御子イエスをお遣わしになりました（ヨハネ三・16参照）。イエスは御父から遣わされたかたです。

イエスの人となりとそのわざは、御父のみ旨に完全に従うものです（ヨハネ四・34、六・38、八・12―30、ヘブライ十・5―10参照）。そして、わたしたちのために十字架につけられて復活されたイエスが、同じようにわたしたちをご自身の愛の躍動へと引き寄せ、教会を生き生きとさせるご自身の霊によって、わたしたちをキリストの弟子とし、使命のためにこの世界と諸国民へ派遣しておられるのです。「使命（ミッション）、『教会が出向いて行くこと』とは、ある種の計画でも、意思の力だけでなし遂げる意向でもありません。教会を外に出向かせておられるのはキリストに他なりません。福音を告げ知らせるという使命を果たそうとするのは、聖霊があなたを突き動かし、あなたを導いておられるからです」（教皇フランシスコ『このかたなしには何もできない―現代世界で宣教者であること』16―17〔Senza di Lui non possiamo far nulla: Essere missionari oggi nel mondo, Libreria Editrice Vaticana-San Paolo, 2019〕）。

神はいつも、まず先にわたしたちを愛してくださり、その愛をもってわたしたちに会い、わたしたちを呼んでおられるのです。一人ひとりの召命は、教会においてわたしたちが神の息子、娘であり、神の家族であること、イエスが示した神の愛において兄弟姉妹である、という事実から生まれます。ただし、だれもが人間としての尊厳をもっています。その尊厳は、神の子になりなさい、洗礼の秘跡と自由意志による信仰によってみ心につねにかなう者になりなさいという神の呼びかけに根ざしています。すでに無償でいのちを受けたということが、一粒の種として自分自身を差し出すという力強い動きに加わるよう招かれていることを示唆しています。洗礼を受けた人のうちでその種は、結婚生活や神の国のために独身で生きることの中で、愛の応答として実ります。人間のいのちは神の愛から生まれ、愛のうちに成長し、愛に向かいます。だれも神の愛から排除されることはありません。そして神は、十字架上の御子イエスの聖なるいけにえのうちに、罪と死に勝利されました（ローマ八・31―39参照）。神にとって悪は――罪でさえも――、愛するため、さらに深く愛するための機会となります（マタイ五・38―48、ルカ二十三・33―34参照）。

ですから、神のいつくしみは、過越の神秘を通して、人類の原初の傷をいやし、宇宙全体へと注がれているのです。この世界のための神の愛の普遍的秘跡である教会は、イエスの使命を歴史の中で引き継ぎ、あらゆるところへわたしたちを派遣します。それは、わたしたちによる信仰のあかしと福音の告知を通して、神がご自分の愛をはっきりとお示しになり、いつどこででも、人々の心に、思いに、からだに、社会に、文化に触れて、それらを変えられるようにするためです。宣教は、神の呼びかけへの自由で自覚的な応答です。しかし、その呼びかけは、教会のうちに現存されるイエスとの個人的な愛の結びつきを生きているときにのみ気づけるものです。次のように自らに問いましょう。聖霊を自分の人生に迎え入れる心構えができているだろうか。結婚生活を送るにせよ、独身での奉献生活や叙階による司祭職を生きるにせよ、日常生活の中で、宣教への呼びかけに耳を傾ける備えができているだろうか。いつくしみ深い父なる神への信仰をあかしするために、イエス・キリストの救いの福音を告げ知らせるために、教会を築くことによって聖霊の聖なるいのちを分かち合うために、どこへでも派遣

一般ローマ暦に記載される
聖ファウスティナ・コヴァルスカおとめの祭儀について

「そのあわれみは世々限りなく、主を畏れる者に及びます」（ルカ 1･50）。おとめマリアがすべての人類のために神の救いのわざを観想しながら「マニフィカト」の中でうたった歌は、天からの恵みを受けて、主イエス・キリストのうちに御父のあわれみ深いみ顔を認め、その告知者となった聖ファウスティナ・コヴァルスカの霊的な出会いの中にも響き渡っている。聖ファウスティナは、1905年にポーランドのウッチ近郊のグウォゴビエツ村で生まれ、1938年にクラクフで亡くなった。その短い生涯をあわれみの聖母修道女会で過ごし、神から受けた召命に自らをすすんでささげ、神秘的なたまものとそれに対する誠実な一致に満ちた非常に熱心な霊的生活を送った。ファウスティナは、主イエスとの出会いの聖域である彼女の魂の日記に、主がすべての人のために彼女の中でなし遂げてくださったことを書き記した。愛とあわれみである主により頼むことにより、人間のどのような不幸も、キリストの心から注がれる尽きることのないあわれみと比べることなどできないことを彼女は理解した。そのため、彼女は全世界に神のあわれみをのべ伝え、嘆願するための運動を促す者となった。2000年に聖ヨハネ・パウロ2世によって列聖されたファウスティナの名は、瞬く間に世界中に知られるようになり、それによって神の民に属するすべての人、すなわち司牧者と信徒の間で、神のあわれみへの嘆願と、信者の生活におけるその確かなあかしが促進された。したがって、教皇フランシスコは、司牧者、男女の修道者、および信者の諸団体の嘆願と要望を受け入れ、世界のさまざまな地域で聖ファウスティナの霊性によって及ぼされた影響を考慮して、聖マリア・ファウスティナ（・ヘレナ）・コヴァルスカおとめの名を一般ローマ暦に記載し、その任意の記念日が毎年10月5日にすべての人によって祝われるよう命じた。それゆえ、この新しい記念日は、ミサと時課の典礼を祝うためのすべての暦と典礼書に記載されなければならない。使用する典礼式文は本教令に添付されており、司教協議会によって翻訳され、認可され、本省の認証を得た後に出版される。以上に反することはすべて退けられる。

Prot. N. 229/20
典礼秘跡省にて
2020年5月18日
長官　ロベール・サラ枢機卿
次官　アーサー・ローチ大司教

される覚悟ができているだろうか。イエスの母マリアのように、何のためらいもなく、み旨に仕える備えができているだろうか（ルカ一・38参照）。

こうした心構えは、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ六・8）と神にこたえるために欠かせないものです。しかも、それは抽象的なことではなく、教会と歴史の今この瞬間にあることなのです。このパンデミックのときに神が何を語っておられるかを理解することもまた、教会の宣教に課せられた挑戦です。病、苦しみ、恐れ、孤立が、わたしたちに挑んでいます。看取られずに亡くなった人、独りで置き去りにされた人、仕事も収入も失った人、家や食べ物のない人、そうした人々の窮状がわたしたちを問いただします。ソーシャルディスタンスや在宅が要請される中で、わたしたちは社会的なかかわりだけでなく、共同体としての神とのかかわりも必要としていることを再認識するよう招かれています。こうした事態によって促されるのは、不信感や無関心を増幅することなどではなく、他者とのかかわり方にこれまで以上に心を配ることであるべきです。

また、祈り―その中で神はわたしたちの心に触れ、働きかけておられます―を通して、わたしたちの心は、兄弟姉妹が求める愛と尊厳と自由へ、すべての被造物の保護へと開かれます。感謝の祭儀を祝うために教会として集うことができなくなったことで、わたしたちは、主日ごとにミサを行えない多くのキリスト教共同体の境遇に触れることができました。こうした状況の中で、神は再びわたしたちに問いかけておられます。「だれを遣わすべきか」。そして、物惜しみしない確信に満ちたこたえを待っておられます。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ六・8）。神は、ご自分の愛と、罪と死からの救いと、悪からの解放をあかしするために、世界と諸国民のもとに遣わす人を探し続けておられます（マタイ9・35―38、ルカ十・1―12参照）。「世界宣教の日」を記念することは、いかに皆さんの祈り、黙想、物的支援が、教会におけるイエスの使命に積極的にあずかる機会となっているかを、再確認することでもあります。十月の第三主日の典礼祭儀での献金として行われる愛のわざは、教皇庁宣教事業がわたしの名で行う宣教活動を支えています。それは、すべての人を救うために、世界中の人々と教会の霊的・物的なニーズにこたえるための活動に使われます。福音宣教の星、悲しむ人の慰め、御子イエスの宣教する弟子である至聖なるおとめマリアが、わたしたちのために執り成し、わたしたちを支え続けてくださいますように。

教区 NEWS 教会

修道生活70周年

ラサール
パーソンズ神父

去る 9 月 16 日は、ラサール神父がカプチン会へ入会して修道者としての歩みをはじめて 70 周年の記念日でした。神父様は 1958 年から司祭として沖縄で奉仕の任に当たり、沢山の人々に多大な影響を与えてこられました。現在は引退されて施設で過ごしておられますが、沖縄を愛して、沖縄の人々の為に果たされた神父様のご奉仕にはただただ感謝するばかりです。

神父様が所属するカプチン会ニューヨーク管区から届いた神父様へのお祝いのメッセージを私たちも分ち合いたいと思います。ラサール神父様、修道生活 70 周年おめでとうございます。

（カプチン会日本地区）

すべてのいのちを守るための月間

日本の司教団は、教皇フランシスコの訪日にこたえて、毎年九月一日～十月四日を「すべてのいのちを守るための月間」と定め、今年から実施しています。祈りのカードが作成され配られていますのでご活用下さい。

すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り

宇宙万物の造り主である神よ、あなたはお造りになったすべてのものをご自分の優しさで包んでくださいます。わたしたちが傷つけてしまった地球と、この世界で見捨てられ、忘れ去られた人々の叫びに気づくことができるよう、一人ひとりの心を照らしてください。無関心を遠ざけ、貧しい人や弱い人を支え、ともに暮らす家である地球を大切にできるよう、わたしたちの役割を示してください。すべてのいのちを守るため、よりよい未来をひらくために、聖霊の力と光でわたしたちをとらえ、あなたの愛の道具として遣わしてください。すべての被造物とともにあなたを賛美することができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

NPO 法人ぶどう園の会

訪問看護ステーション クララ

TEL&FAX:098-937-5001
住所　沖縄市泡瀬2丁目37-15
・基本受付　月曜日～金曜日（申込、相談など）
・営業時間　8:30～17:30
・営 業 日　24時間365日（緊急対応含む）

カトリック文化センターからお知らせ

いつも文化センターをご利用いただき有難うございます。
今年はコロナ禍の影響もありバザー等の出張販売はできなくなりました。
それに伴い今年は例年より早めにカレンダーや手帳等の店頭販売をスタートいたします。是非ご利用下さい。

問合せ：電話098-868-4649（新川・崎山）

◉ キリスト教関係の書籍、宗教用品等のご用命は、「カトリック文化センター」を通してご注文下さるようお待ちしております。
〒900-0005 那覇市天久 1-8-7

葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～

葬典社（そうてんしゃ）

＊創業30数余年・・・。
＊皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
＊ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

（実務担当）比嘉（ひが）　高茂（たかしげ）

24時間受付

☎098-853-1059（てんごく）